

彦根城博物館所蔵『今昔物語』卷三の本文の位置づけ

中根 千絵

一、はじめに

論者は、『説林』五三号において、彦根城博物館所蔵『今昔物語』（全巻、表紙の題には『今昔物語』と書いてあるが、内題には『今昔物語集』とある。）の紹介を行ったが、その際、本の空白部分の分析、流布本系共通脱文の分析から、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、内閣文庫本Bに近い流布本系の本であり、内閣文庫本Bより良い本であろうと論じた^①。しかし、その位置づけが正しいかどうかは、諸本との一語一語の比較を経て、初めて、立証されるものである。卷一については、先に分析を行い、彦根城博物館本は内閣文庫本Bとのみ一致する箇所が多く、これは、『説林』五三号で論じたのと同じ傾向であるが、旧日本古典文学大系の底本である東大本甲や東北大本、野村本とのみ一致する箇所もあり、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ABC、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東北大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということ^②を述べた。卷二の場合は、鈴鹿本という原本に近い本が残っているせい^③か、古態を残すとされる東大本甲、東北大本、野村本と一致する箇所は非常に少ないという結果が得られている。卷三についても同様に、彦根城博物館所蔵『今昔物語』の本文を他の諸本と比較することにより、彦根博物館所蔵『今昔物語』卷三の位置づけを試みることにしたい。但し、諸本の収集は、いまだ、

その途上にあり、今回は、旧日本古典文学大系『今昔物語集』の校異と頭注⁽⁴⁾から必要な部分を抜き出す形で、諸本との比較を行うこととする。

二、彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻三の本文異同

凡例

一番上の段は旧日本古典文学大系のページと行、次の段は彦根城博物館所蔵本の本文、次の段は彦根城博物館所蔵本と同じ本文を持つ本の種類である。(但し、異体字などの字形が異なるものについてはこれに含め、その都度指摘した。)★印は彦根城博物館所蔵本独自の部分であり、その部分については諸本の例を示した。旧日本古典文学大系に載る考察は必要に応じて「」に入れて付した。

各本の略語は次の通りである。

底―旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本(東大本甲)【旧日本古典文学大系『今昔物語集』の底本が現在の諸本のうちの古態本にあたると思われることから、底の字を使うことで、それが一見して明らかとなるようにした。】

北―東大本 野―野村本 以上古本 乙―東大本乙 A―内閣文庫本A B―内閣文庫本B C―内閣文庫本C
以上流布本 東大本甲を除く諸本―諸

彦―彦根城博物館所蔵本

大―旧日本古典文学大系

卷三第一話

二〇四 5 十方諸佛

乙ABC

6 方丈ノ内ニ

乙ABC (Bは内にイと朱傍)

7 亦居士モ

野ABC

8 浄名居士ヲ

乙AB (Bは本ノママと朱傍)

16 歩ミ

諸「歩ビ」底大

二〇五 1 居士答テ

乙ABC (土の下にBはニイ、Cはニと朱傍)

4 語り傳へタルトヤ

乙ABC

卷三第二話

二〇五 10 伏藏ヲ□ク

乙ABC (Bは開イ、Cは闕字と朱傍)

12 白佗生ス

乙ABC (Bの佗は異体の変佗イと朱傍、Cは佗の下にヲと朱補)

14 攝メ給フ

底野B (メに底はメと朱訂、Bはシイと朱傍)

二〇六 3 語り傳へタルトヤ

AC

卷三第三話

二〇六 7 御弟子比丘等ニ

諸 (Bは比を此に作り比イと朱傍)

15 愚痴ナル故ニ

乙AC

16 虫ニ

乙ABC

二〇七 2 此疑テ

ABC (Cは此の下にヲと朱補)

4 語り傳へタルトヤ 乙 A B

卷三第四話

二〇七 10 中二 乙 A B C

11 羅睺羅 A C

12 瘦黒クシテ A B C

16 肥タルソヤト 乙 A B C (Bの肥は変)

16 攀縁發シテ 乙 A B C (Bは縁を縁に作り縁と朱訂)

二〇八 3 人ノ請ヲ 乙 A B C

5 毒蛇ニ有リキ 乙 A C

6 宣ヒテ B

7 勤メケル事 乙 C

卷三第五話

二〇八 14 捕 大 底の「補」は異体字

14 地ニ 底野

二〇九 2 不 缺シテ 乙 A B (缺は変 即ち旁を彦乙は支、Aは尺、Bは爰に作る Bは毀イと朱旁、乙

A Bはメ)

5 桃ナムハ 乙 A B C

5 断リ 乙 A 「断ク」 B (クを朱括弧で囲みイと朱傍) 「断」 C 「裁リ」 底野大 (底朱傍訓コ

トハ)

東大本乙以下の流布本は、用字を断に改めた。

6 語り傳へタル也

A B C

卷三第六話

二〇九 舍利弗

乙 A B C

11 慢リ

「慢リ」大彦底「慢」異体字

12 仍ニ

大内閣文庫本C、「シキリニと訓ずるは不可。同B本二は不審紙を附してある。」

13 訪ハムト為ニ

乙 A B C (Bのムはン)

二一〇 3 此事ハ

乙 A B C (Bの事はコトの合字)

7 其時

乙 A B C

8 施ヲ

乙 A B C

9 亦咒願スヘキ也

乙 A B C

卷三第七話

二一〇 13 第七

乙 A B C

16 師ノ如ク

乙 A C

二一一 1 悪事有ナム

乙 A B C (C傍訓アクシ)

4 供養スルニ

諸

5 洗フ間

諸

6 食スニ

乙 A B

8 不過

乙 A B C

9 即チ

乙 A B C

1 2 雲ノ如クトリ

乙 A B C (Bはトリを朱括弧で囲みイと朱傍)

1 6 形ニ成テ

乙 A B C

二二二 1 捷推撃龍

乙 A B C (C傍訓ケンツイゲキリユウ)

2 猶トモ

底大

に使われる。」

「トモが小書してある点に疑点は残るが、トモスレバと熟する語は、かな文字に普通

卷三第八話

二二二 5 第□

底野 A B

9 率都婆

乙 A B C

9 供養シテ

乙 A B C

1 0 死ス

A B C

1 2 洞ノ口

乙 A B C

二二三 1 汝努メ其事不可怠ル

A

5 瞿波羅龍王ト云

乙 A B C (Bは波を被に作り波と朱訂)

卷三第九話

二二三 9 金翅鳥

諸

9 第□

底野 A B

13 金翅鳥

乙 B (乙 金は後筆の如し)

14 被取ヌ

B 「被取テ」底野大「被取ラヌ」A C 「被取ラメ」乙

「ヌ」に作ると二重否定の意となる。

二二四 3 置タルヲ

B (ヲにニイと朱傍)

卷三第十話

8 第□

諸

9 片岫ニ

大

内閣文庫本 C はヤマと訓図。同 B は岫と書き、岫と朱訂す。

13 巢テ作テ

A B C

14 鳥ノ子ヲ

乙 A B C

15 海ノ側

乙 A C

16 可為方

乙 A B C

二二五 1 死テ

乙 A B C

5 カヲ動スト云ヘトモ

乙 A B (B は動の右に勤イ 左に勵と朱傍)

6 平安ニ養ヒ立ツ

乙 A B C

6 知ル

A B C

卷三第十一話

- 二二五 11 天竺ニ
乙ABC
- 11 離テ
乙AC
- 11 スチ無シ
乙ACC (乙ACCは無)
- 12 御一族ヲ
乙ABC
- 12 人
乙ABC
- 14 此孫ノ
乙BC (乙孫の偏夕、Bはモトノママと朱傍)
- 14 死ヌト
底A
- 二二六 3 落ヌ
諸
- 3 陰ニ
乙AC
- 5 遊フ程ニ
諸
- 9 恠ク思ケレハ云様ハ
乙ACC (乙はクをりに作る)
- 10 汗付テ
乙ABC
- 10 何テカカク
底野乙
- 10 恭ク
AC
- 10 馴給フニ
AB
- 14 流人ニテ侍レハ
乙ABC
- 15 人ノ物ト
乙ABC
- 15 何クニ
乙ABC
- 二二七 3 然ハ糸慎マシク侍リ
乙AB

- 11 云行テ
- 15 膝々ツキテ
- 16 願クハ
- 16 随テ
- 二二八 1 摩尼珠瓔珞
- 3 瓔珞ヲ
- 8 龍女
- 8 見テ 約一八字分欠
- 10 ト云フ
- 10 其レニ
- 10 此世界也
- 11 命長クテ
- 12 見セサ給ヘトモ
- 12 七宝ヲ
- 15 龍王ノ云
- 二二九 2 拔立レハ
- 4 曳将テ
- 4 思得テ
- 5 懐ム
- 6 婚合ノ

乙ABC

B (彦Bの膝は変 Bは に膝イ膝々にマイと朱傍)

乙ABC

乙ABC

乙ABC

乙ABC

乙ABC

乙ABC

大は三十字分欠、底一行分欠、流布本はあきを詰める。

乙ABC

AB (Bは二にハイと朱傍)

B

乙ABC

B (セに衍歟 サの下にセイと朱補 モにナシイと朱傍)

諸 (諸は寶)

ABC (Cは云の下に如と朱補)

ABC

諸

B (得ヲ傳と朱訂) 彦は得の上に傳と重書き。

諸

乙ABC

6 九ツ

A C

6 舌ナメツリ

乙 A C

9 悟テ

諸 (底の悟は変 立心偏×倍の旁)

9 痛ミ給ヒ

乙 A B C

11 痛ム

乙 A B C

卷三第十二話

二一九 15 信シ敬テ

諸

二二〇 4 法ヲ聞キ

A B C 乙は脱

5 被瞰ヌ

底 乙は脱

6 四天王ニ

A B C 乙は脱

卷三第十三話

二二〇 13 悉達太子ト申シ時ニ

A B C (Bは悉の上に仏歟と朱補) 乙は脱

13 御シキ

B 乙は脱

二二一 1 慕悪ニシテ

A C 底野 (底野の暴は動用字慕、Aのシテは合字、C傍訓ボウアク)

2 太子ヲ追テ

諸 (底の追は変道に近し) 乙は脱

6 自然ラ

野乙 A C

7 汲ナムカ為ニ

野乙 A C

9 食フ程ニ

諸

10 汲セテ返り来り問ハ 乙AC

ムニ

12 眠り入タル程 乙AC

12 走り入ニケルソト 乙B

14 逃テ海ニ入ラム 乙AC

15 食セスシテ 乙ABC

16 死スレハ 乙AB

二三二 2 不喜ヒソト 乙AB

2 命万ヲ 底野

3 餓死セハ 乙ABC

6 夫妻ニ成ルト 乙ABC

6 不怪ル也 AB

6 瞋恚ヲモ 諸

6 茨サシメテキト 諸(諸は菝)

卷三第十三話の後、

四行空白

卷三第十四話

二三二 13 人ニ不似

乙ABC

14 様ノ

乙ABC (Bはヲイと朱傍、Cはヲカと傍書)

16 室ヲ造テ

野ABC

一一三三 5 難背キ

乙AB

6 勲修シ給フ

諸 (野は勲の右下にニ東と朱補、Cは勲に慙イと傍書)

7 金剛醜女有様ヲ

乙ABC (Cは女の下にカ歟と朱傍、Bはヲをテに作りヲイと朱傍)

10 我カ形ヲ

野乙AC

11 佛ノ

乙ABC (Bはノにナシイと朱傍)

11 歡喜ス

諸

一一四 2 蒙レリ故ニ

乙ABC

3 宮

流布本「宮ニ」大 宮においての意であろう。

3 輦ヲ

諸 (Bの輦は変輦イと朱傍)

8 一俵ノ

乙ABC

10 僧ヲ

諸

卷三第十五話

一一四 15 抗太子

「燼抗太子」諸 (彦底の燼は変、Bは抗の旁をウ冠に作り抗イと朱傍)

一一五 1 摩竭提國王有リ

乙ABC

2 第一ヲ

野乙B

5 責メ罰ス

ABC

7 迹去ル丁ヲ

乙ABC (乙ABCは事)

- 9 騒動スルハ 乙 A C
- 9 不知給ヤ 乙 A B C
- 9 此國ヲ 乙 A C
- 11 事モ非ス事ニコソ有 乙
- ナン
- 11 何ニ我ニ速ク不告リ 乙 A B C (Cはりなし、Bは我ニを朱括弧で囲みイと朱ケル傍)
- 12 追返サンヤト云ニ 乙 A B C (Bのムはン)
- 12 不信給ハ 乙 A B C
- 13 其時ニ 乙 A B C
- 13 大王ノ前ニ 諸
- 二三六 4 打ニスラ 野 A B
- 4 一ノ箭ヲモ 諸
- 4 放タント 乙 A B C (乙Bのムはン、Bはトに朱圈点)
- 5 此軍ノ 乙 A B C
- 6 不及力 乙 A B C (Bの力はカの如し)
- 7 下品ノ人モ 乙 A B C (Cはモにニと朱傍)
- 7 上品ニ 乙 A B C
- 8 下品ノ人ツラ A C
- 10 令娶ハ 諸 (Cはハにム歟と朱傍)
- 12 某月某日 底野 B

14 淀ミニモチ

乙 A C (チは千の如し、Cはチに又カと傍書)

15 前裁ノ

乙 A B C 「前裁ノ」底野大「裁」は「裁」が正しい。

15 花ヲ翫ヒ

A B C

二二七 3 咲テ云ク

B

7 歎ク丁

乙 A B C (乙 A B C は事)

7 夜曙テ

乙 A B C (曙は変 旁の上部は日)

9 太子申サク

乙 A C

10 帝釈宣ハク

乙 A B C (乙 A B C は釋)

11 子ニアリキ

B

11 乞ニキ

乙 A B C

12 一勾ヲ

流布本「一タヲ」古本大「夕」は「勺」の借字

15 其時

乙 A B C

16 我

B C

二二八 1 此ノ得タル

B

1 置ケレハ

乙 A B C

7 改ケリ

乙 A B C (乙の改は卩偏)

8 思ヒ遣ルヘシ

諸 (Bはシの下にト歟と朱補)

卷三第十六話

二二八 12 摩竭提國

乙 A B C

	15	水餓ナムトス	乙AC
二三九	1	自然ニ	乙ABC
	3	有カ	C
	3	眼ノ無ク面ノ醜カト	乙AC (乙ACは無)
	4	輿ヲ留テ	乙BC
	4	不缺	BC (Aの缺は変 金偏に近し)
	5	家貧キ	B
	8	此世ニ	乙ABC
	8	心有也	B
	9	宣テ	諸
	11	可帰参シ	乙AB
	11	獨	乙ABC
	11	給ラムト	乙AC
	11	母ニ云リ	★ 「母云ク」底野大 「母ニ云ク」乙B 「母ニ云ム」AC
	14	相叶ツルニ	B
二三〇	1	宮ニ還テ	乙AC
	1	聞ス	★ 「聞ヌ」乙ABC 「聞レ」底 (レをユと朱訂) 「聞ユ」野大
	2	道人ノ	乙ABC
	4	着セテ	乙ABC
	5	后	乙ABC

6 天下ノ政

B

卷三第十七話

二三〇 12 一人比丘

乙ABC

15 失ツル

乙ABC

二三一 1 還キ見ルニ

ABC (Bはキにテイと朱傍)

5 此人

B

6 失シテ

乙ABC

7 願ハ

B

10 還俗シ給ヒケリ

AC

14 有ル時

乙AC

卷三第十八話

二三二 10 弟子ニ

野乙AC

11 拾フ

乙ABC

11 朝暮ニ

諸

14 沙弥等ノ

乙ABC

14 待見ル時ニ

乙BC

二三三 1 聞キ

乙ABC

5 見タリ

乙ABC

5 有キカ
 8 無上菩薩
 9 可悟ルト

卷三第十八話の後、
 九行と半枚空白

乙 A C (Cはキにテと朱傍)
 A B C (Bは薩に提イと朱傍、A B Cは無)
 乙 A B

卷三第十九話

二三三 14 営ム

乙 A B C (乙 A B Cは營)

14 性貧ノ

B

15 何ナル時ニカ

乙 A B C

16 不聞シテ事ヲ得テ

B (シテを朱括弧で囲みイ 得テにモトノママと朱傍)

一三四 1 其時

乙 A B C

1 讚セラルニ

A B C (Bはルの下にルイと朱補)

2 云ク

野

3 不擯出ルヲ

乙 A B (Bはヲにソイと朱補)

6 令持テ

諸 (底の持は変 木偏)

6 謀ケテ

野

7 羅睺

乙 A B C (Bは睺の下に羅敷と朱補)

10 覆テ

A C (Cはテにニと朱傍)

- 11 見ルニ
12 仰キ
12 亦佛在マス
15 波羅門
16 佛
- 二三五
2 親リ
8 須達カ家ニ
8 千二百五十ノ比丘化
シテ
- 9 老婢
9 玉女為リ
12 弊悪
12 告ク
16 得ツ
- 二三六
5 師トシ
5 阿闍梨ノ
7 持ツト云ヘトモ
8 出テ

乙ABC

乙ABC

乙ABC (Bの又は亦)

諸大「婆羅門」C 「波」は「婆」の省文か

乙ABC

底野乙(底野はりにク歟と朱傍あるも採らず)

乙ABC

乙ABC

シテ

乙ABC底野(Bの婢の旁は昇、底野の婢波変 日偏、野は女偏に朱訂)

乙ACC(Cは女の下にニと朱補)

底「弊悪」大 「弊」「弊」の異体字

諸(Bは吉イと朱傍)

諸大「得ノ」B

「得ツ」では上の疑問詞及び有テに対する照応が不足である。或はもとツはソとあつたものか

乙ACC

乙ABC

乙ABC

乙ABC

卷三第二十話

- 8 聾音ノ 乙ABC
- 8 千二百世ニ 乙ABC
- 11 弟子ノ 乙ABC (Bはライ、Cはヲと朱傍)
- 11 今道ヲ 乙ABC

二三七 1 食ス

乙ABC

- 3 寄キ居ヌ C

- 4 取シメラレ奉テ 乙AB (Bは取に耻敷と朱傍)

- 4 居タルヲ 諸

- 5 犬ニ 乙ABC (Bは太敷と朱傍)

- 5 罵詈ル奉ル 乙AB (Bは上のルにリイと朱傍)

- 7 犬 乙ABC

- 10 願ヒシカト 乙AC

- 11 何ニ依テ B

- 14 云ヒ聞カセテ ABC

- 15 瞋恚ヲ不止ト

★「瞋恚不止ト」AC「瞋恚ヲ不止ズト」底野「瞋恚ヲ不止ノ」B(ノにトイと朱傍) 乙は脱

二三八 2 鼻シテ

ABC 乙は脱

- 4 此犬実ニ父 ABC (ABCは實) 乙は脱

4 有ケレト思テ ABC 乙は脱

5 生々世々 B (Bはと) 乙は脱

6 何ノ功德ヲ AC

7 獨身草臣ナル者 AB (彦Aの草は竹冠、Bは草臣に単臣イと朱傍)

8 有リ 諸

8 有リ 諸 乙は脱

10 随スル者ハ ★ 「墮ル者ハ」底野大「墮スル者ハ」AC 「随スル有ハ」B (有に者イと朱傍)

乙は脱

11 瞋恚發セシ者ソ B (Bは發) 乙は脱

11 死スル時ニ 野B 乙は脱

14 敬害行セサリシ者ソ AB 乙は脱

15 瞋恚ヲ發サシメシ者ソ底野 (底野は菝)

15 被敬者ハ B (敬に殺イと朱訂)

卷三第二十一話

二三九 7 糞ナシ

野ABC

7 糞テ 底野乙ABC (彦底野乙の糞は竹冠、Bは口を口に作る)

8 吐キ ABC (Bは本ノママと朱傍)

8 塞テ B (テイと朱傍)

9 行ヲ道ニ 乙ABC

10 懸レリ

諸

14 石ノ中ヨリ

乙ABC

二四〇 2 見ツトヤ

諸（底はツヤト歟と朱傍、Bは顛倒符を附シイと朱傍）

4 不浄ノ

乙ABC

4 羅漢果ヲ得

乙ABC

5 貪欲

C

7 隋シテ

B（墮イと朱傍）

卷三第二十二話

二四〇 10 慳貪

乙AC

12 歡喜

乙AB Cは脱

14 我今節慶際

底野乙

14 亦勝天帝釋

諸（乙の帝は補入）

16 詣テ給フニ

乙AC

二四一 2 扣ク

乙AC底野（底野乙の扣は変 木偏）

卷三第二十三話

二四二 1 佛父方ノ

ABC

2 慳貪女ヲ極テ

乙ABC（ヲにBはノイ、Cはノと朱傍）

9 其時ニ

乙ABC

10 死スルト

諸 (底はスをヌと朱訂)

10 スル時ニ

B

11 其時

乙 A B C

13 我力ヲ

乙 A B (Bはヲを朱括弧で囲みイと朱傍)

二四三 1 慳貪女ヲ

1 説キ

諸

2 慳貪ノ

乙 A B C

卷三第二十四話

二四三 10 世ニ

10 教へ給ヒキ

乙 A B C

13 開ク

乙 A B C

二四四 1 汝

2 忉利天

乙 A B C 底野 (底野の忉は変 即ち切に近し)

3 卅九重ノ

A B

9 何ノ新ノ糸

乙 A B

9 懸ケ

底乙

13 閻浮提

諸

卷三第二十五話

二四五 4 采女 流布本「姦女」大

8 后ナトナレトモ 乙AC

8 死テ 乙ABC

8 随ナムト B (随に墮イと朱傍)

9 カ、レハ 野乙AB

9 土ト身也 乙B (Bはトの下にナルイと朱補)

11 人 乙ABC

13 勅ヲ背テ 野ABC

13 宮ニ還ラハ即チ 乙AC

14 持タムニ不及 乙ABC

14 須臾ノ 底野乙 (底野の臾は変)

二四六 2 死ナムト云 乙AC

2 三途ノ 乙ABC

2 殖フ 乙ABC

2 善根ヲ以テ 乙ABC

卷三第二十六話

二四六 15 諸國 乙ABC (乙ABCは国)

15 分チ遣スニ 乙AC

二四七 2 不損セ 乙ABC

卷三第二十七話

9 在テ

乙ABC

9 御狩ノ

乙ABC (底Aの狩は変 即ち旁は將の旁)

10 返ヌ

野乙AC

二四八 6 擧ニ乘リ

B (擧に輦イと朱傍)

11 力也ト

乙ABC

二四九 5 構テ

乙ABC (Bはテにフィと朱傍)

9 願クハ

乙ABC

12 授ケ

底野

16 塗リ

乙ABC

二五〇 4 菴羅衛女

諸 (底の衛は変 即ち行構の中は言)

5 造リ給フ

野乙ABC

5 悪王アリ

B

5 貪ル為ニ

乙AC

8 死ヌ

底野 (底のヌはスに近し)

9 沙羅林中ニ

乙ABC

9 説キ給ヘリ

B

13 修スルヲ

乙AC

二五一 2 墮入給ナム

乙ABC

卷三第二十八話

- 3 終リニヨリ 諸 (底はヨリにコソ歟と朱傍、Bは終りのりにナシイと朱傍)
- 7 光ナラム 乙ABC (Bはナラをサニに作りナライと朱傍)
- 7 参ラハ 乙ABC (Bはラをヲに作りライと朱傍)
- 12 問給フ 乙ABC
- 13 今汝チ今我カ許ニ 乙AB

二五二4 年既ニ至リ給テ

ABC

4 痛シ

諸

5 可入ト也ト

乙AC

7 何故ニ今痛ミ給ヘルト乙ABC

7 光ニ値ヘル衆生 乙ABC

9 生ル者定テ死スル

★「生ヌル者ハ定メテ死ヌル」底大「生ヌル者ハ定テ死ル」野「生スル者定キ死スル」乙「生スル者ハ定テ死スル」AC「生カ者定テ死スル」B (カにスルイと朱傍)

11 一切衆生ヲ

乙ABC

16 藥

乙ABC (乙ABCは藥)

二五三1 悲歎ク

諸 (諸は事)

2 不歎ルトナム

乙AB

卷三第二十九話

二五三 6 云フ

諸 (Bは云をスに作り云と朱訂)

7 王巧

乙ABC (Bの巧は変 巧イと朱傍)

8 哀ヒ給テ

諸 (Bのヒはニの如くも見ゆ)

二五四 1 其時ニ

乙ABC

6 飾饈

諸

8 可行ス

乙AB

9 一切

乙ABC

13 満テ

乙ABC

13 衆會大衆

乙ABC

卷三第三十話

二五五 3 悲テ

乙ABC

4 見シト

乙AB (Bはシをンに作りシイと朱傍)

12 不見給ハ

乙AB

15 宣ハ

乙ABC

二五六 1 是ヲ以テ

B

1 佛スラ

ABC

2 迷ハム

乙ABC (Bの迷は変 迷イと朱傍)

卷三第三十一話

二五六 11 乗スヘシ

乙ABC (Bは乗スに垂ヌイと朱傍)

11 宣ヒ置テ

野乙AC

12 阿難ノ諸ノ

底野乙

13 各歎カスト

乙ABC

14 皆悉ク

乙ABC

卷三第三十二話

二五七 5 出来ル

乙ABC

11 五百帳疊ヲ

乙ABC

15 金色モ

乙ABC

卷三第三十三話

二五八 8 昇リ

乙ABC

15 至ル

乙ABC (Bは不審紙を押ししたり)

二五九 1 其時

乙ABC

1 令開テ

諸

8 宣ヒテト可語ル

乙A「宣ヒテト可語」BC「宣ヒキト可語シ」野「宣ヒテト可語シ」底大(トの字
体不整 トと朱訂)

「このままでは破格の感なきを得ない。恐らくはキをテと誤ったものか、「宣ヒテ
キ」のキの脱落か、であろう。」

卷三第三十四話

二六〇 4 滅シヌ

C

8 衆

乙ABC

10 心胸ノ中ニ

大

11 泣キ悲ム丁

乙ABC (乙ABCは事)

16 火ニ灑キ給フ

乙ABC

二六一 7 然カ思フ也

乙ABC

7 龍ニ

諸 (Bは龍の下に神イと朱補)

9 行キナハ

乙B ACは脱

13 自然ニ

乙ABC

卷三第三十五話

二六二 3 有リ

乙B

13 入テ

乙ABC

14 不有テ

乙B (Bはテにキイと朱傍)

15 我等

乙ABC

15 令得タラム

乙AC

16 宝トシ

乙ABC

二六三 4 群臣

BC (Cはイ郡と朱書)

5 群臣

諸

6 遠國

諸

二六三 9 然ルニ今佛舍利ヲ諍 ★ 「而ルニ今佛舍利ヲ諍カ故ニ」乙ABC大「而ルニ

カ故ニ 今佛舍利ヲ今諍カ故ニ」底野（底は上の今小書補入 下の今をみせけち）

10 善哉云フ

C

15 直テ

乙ABC

二六四 8 出ル時

乙ABC

8 生レ給フ

諸

9 八日生レ給フ

諸（底は二歟、Bはニイと朱補）

三、おわりに

『今昔物語』巻三の本文の異同を見ると、彦根城博物館所蔵『今昔物語』と同じ表現を多くもつのは内閣文庫本ABと東大本乙である。中でも内閣文庫本Bは、彦根城博物館本とのみ一致する箇所が多い。これは、『説林』五三号^⑤で論じたのと同じ傾向にあるといえる。また、先の論集^⑥で扱った巻一、巻二の本文の分析結果とも一致する。しかしながら、巻三の場合に顕著な傾向として現れるのは、古本系のうちの野村本との一致度が高いということである。巻一の分析では、彦根城博物館所蔵『今昔物語』は、流布本系諸本（内閣文庫本ABC、東大本乙）と古本系諸本（東大本甲、東大本、野村本）の間の状態を有する希有な本であるということ指摘したが、巻三では、特に、野村本が流布本系と古本系との狭間で揺れている様を見ることができるといえる。『今昔物語』巻二の本文では、古態本が鈴鹿本をかなり正確に書写していて、流布本系の表記と一線を画すのに対し、巻三の場合には、鈴鹿本を有しない影響なのか、野村本は流布本の表記の影響を大きく受けていることが見て取れる。この状態からは、次のことが推測される。すな

わち、古態本系は、基本的には、原本通りに正確に写し取ることを目指した書物群であるということである。そこで、たまたま、出会った書物が流布本系であれば、流布本系の表記を引き写すことになる。それでは、流布本系の目指したものと何であったのか。今、仮説をたてるのが許されるならば、流布本系は、校訂本文を目指した書物群ではなかったか。但し、彦根本のように、中間的な表記を有する書物の場合には、いまだ、そのどちらとも見定めがたいものがある。今後、さらに、巻ごとの分析を続け、彦根本の性格を見極めると共に、古態本と流布本の総合的な分析を行っていきたい。

注

- 1 中根「未紹介本『今昔物語』(彦根博物館所蔵)についての一考察」(『愛知県立大学説林』53号 二〇〇五年三月)
- 2 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻一の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』54号 二〇〇六年三月)
- 3 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』55号 二〇〇七年三月)
- 4 本稿の中で引用した旧日本古典文学大系の校異は、『今昔物語集一』山田孝雄 山田忠雄 山田英雄 山田俊雄 岩波書店 一九五九年によるものである。
- 5 1に同じ。
- 6 中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻一の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』54号 二〇〇六年三月)、中根「彦根城博物館所蔵『今昔物語』巻二の本文の位置づけ」(『愛知県立大学文学部論集』55号 二〇〇七年三月)

本論文は、二〇〇五～二〇〇八年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)(17520123)「今昔物語集本文の享受史研究」の成果の一部である。